

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 4 日現在

機関番号：34603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01195

研究課題名(和文) 帝国日本における戦時輸送の地域間関係に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Transportation Relations between Some Regions in Japanese Imperial Wartime

研究代表者

三木 理史 (MIKI, Masafumi)

奈良大学・文学部・教授

研究者番号：60239209

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は2013年度から実施してきた満鉄輸送史に関する研究内容を継承しつつ、1940年代以後の動向を、内地との連携を意識しつつ1940年代の帝国日本の輸送を地域間関係に配意して研究範囲を拡大したものである。途中2020年からはCOVID19の影響によって海外渡航が困難になったため、満洲に関する研究内容はそれ以前の現地調査を踏まえた著書の集成に専念せざるを得なかった。他方国内調査にはより多くの時間を割くことができたため、特に1940年代を中心に国内輸送網の変化に関する複数の論文を発表することができた。それによって2023年度以後の科研費課題番号23K00994に関する研究につなげられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず『満鉄輸送史の研究』によって、これまでの「満鉄は鉄道の運営を第一の事業としていたにもかかわらず、戦後はそれに関する本格的な研究が極端に少ない」(岡部牧夫編『南満洲鉄道会社の研究』日本経済評論社、2008年、400頁)のような批判に対し、一定の成果をあげることができた。また、これまで帝国圏輸送は、観念論の域にとどまり、実際には日本列島周辺海域を挟んで分断し、植民地と内地とは切り離されて考えられてきた。その結果、1940年代の内地における資材供出目的の鉄軌道廃止なども十分に資料的裏付けのないまま言及されてきた。本研究によってそうした研究史上の空白を埋めることができた。

研究成果の概要(英文)：This study had been acceded to some researches about the South Manchuria Railway since 2013 and become huge the relationships of transports between colonial and inland regions in the Japanese Empire in the 1940s. Because the author had been hard to make a voyage across overseas by COVID19 after 2020, he had been forced to write articles about Manchuria before field studies. As a result, the author had been published "Relationship between South Manchuria Railway transport systems and colonial settlements in Manchuria" Hanawa-shobo:Tokyo in 2023. The author had been published articles about inland at the core of the 1940s transports because he had been able to spend more times in national searches. He had been able to research carry an affair with JSPS23K00994.

研究分野：歴史地理学

キーワード：南満洲鉄道 輸送 帝国日本 戦時体制 鉄軌道 資材供出 1940年代 地域間関係

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は大日本帝国末期 1940 年代の戦時輸送の地域的關係を明らかにしたものである。[課題 A]南満州鉄道を中心に日ソ戦に伴う「満洲国」・占領地輸送の変化、[課題 B]帝国輸送網の要に位置した内地鉄道輸送の変化、[課題 C]両者を結ぶ海上輸送の変化、の 3 つの課題を設定した。これまで戦時輸送とは民間輸送の犠牲の下に軍事・軍需輸送を優先してきたように語られてきた。その根拠は当該期の体験者の談話が大きく影響している。しかし戦時輸送が佳境にあった 1940 年代は大日本帝国が最も膨張した時期でもあり、内地と外地、さらには軍事的占領地の間には相互に地域間關係が存在した。また、それら体験談が影響力をもったのは、「軍事秘」の名の下に当該期に関する統一的な統計資料や記録が非常に稀少になることも関わっている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで軍事・軍需輸送として兵員や兵器輸送に徹したかのように語られてきた戦時輸送が、実は軍属など民間人輸送や産業関連輸送なども含めて多様な地域間關係を伴って行われていたことを明らかにすることにあつた。近年のその代表的成果に林采成『戦時経済と鉄道運営』(東京大学出版会,2005年)と同『華北交通の日中戦争史 - 中国華北における日本帝国の輸送戦とその歴史的意義』(日本経済評論社,2016年)があるが、いずれも研究対象が各々朝鮮半島と華北地域に限定され、帝国日本において各々の地域のもつ意義や他地域との關係が十分に明らかにされていない。すなわち 1940 年代とは帝国日本が最大の範囲にまで膨張し、しかも石油をはじめ資源・資材の制約を強く伴ったがために、海上輸送の途絶をよそに最も地域間の連携が求められた時期でもあつた。

つぎに本研究で特に重点を置く「満洲国」に関わる満鉄の研究では、日ソ戦争に関わる兵員・兵器の輸送はもとより、それに備えて入植を進めてきた開拓団、北満の産業化、さらにはそうした北満への内地からの捷路として注目された日本海航路による北鮮港湾都市への直結ルートが重要な意味をもった。これらは[課題 A~C]のすべてに関わる内容を有しているが、必ずしもその実態を明らかにしてはおらず、特に本研究の独自性高い内容といえる。また北満ほど満鉄の輸送力との關係が密接ではないが、日中戦争に関わる華北、華中の軍事占領地との關係の考察も[課題 B・C]と關係をもつ内容といえる。林(2016)の成果を有する華北に比べて研究の遅れた華中以南については研究の意義が大きい。

一方[課題 B]に関わる内地については、体験者が豊富なだけに客観的裏付けを欠く情報の影響がむしろ大きい。すでに三木理史『都市交通の成立』(日本経済評論社,2010年)で大阪を中心とした大都市圏について明らかにしたように、国有鉄道のみならず、民鉄をも巻き込んだ海上貨物輸送の陸運転嫁の影響を、より全国的な視点で検証するこ

とは[課題C]とも関係を有する。そしてそこで生じた輻輳する客貨を捌いた経験は、戦後高度経済成長期の大量輸送実現の大きな経験となり、現代のモーダルシフトにも展望を与える歴史的教訓を引き出し得る創造性ある内容でもある。

### 3. 研究の方法

1940年代前半に最も膨張した帝国日本の領域は、北は樺太・北満から南はマレー半島、東は南洋群島(ミクロネシア)、西はインドにかかる広大な範囲であり、そのすべてを4年間で明らかにすることは当然困難である。そこで本研究では、前年度までの満洲に関わる課題の総括と、帝国日本の要となる内地の検証に重点を置き、その他の地域については関係が生じた場合に限って取り上げる。

前述の[課題A~C]の各々について1年度ずつ取り組む予定であった。まず平成31年度は[課題A]に関わってノモンハン事件や関特演から日ソ戦争終結に至るまでの北満で満鉄の展開した軍事輸送の実態を、防衛研究所所蔵陸上幕僚監部編『軍事的に見た満洲における鉄道整備』を軸に明らかにし、現地調査は中国東北で実施した。また最後の満鉄総裁の山崎元幹の残した国立国会図書館県政資料室所蔵『山崎元幹関係文書』の分析を行った。ここまでは研究計画調書と大きな相違なく進行することができた。

ところが令和2~3年度からはCOVID19の影響によって海外渡航が困難になったこと、また国内調査も制限されたことで、[課題A]に関わって華中鉄道に関する調査を蘇州、南京、上海を中心に行う点はすべて断念し、代わって[課題B]に関わる内地の戦時輸送の基本資料『長崎惣之助文書』(DVD版、原本：鉄道博物館)や国立国会図書館県政資料室所蔵『柏原兵太郎文書』などの個人文書の博搜によって、客観性ある史実の発掘に努めることに集約せざるを得なかった。それによってこれまで等閑に伏されてきた戦時期の内地における鉄軌道の休廃止による資材供出について分析を進めることができた。

他方令和4年度には[課題A]に関わって前年度までに到達できた成果を『満鉄輸送史の研究』(塙書房,2023年)として刊行することにより、2013年度以来蓄積してきた成果を集成することとした。また、当初当該年度に予定していた[課題C]に関わる研究はJSPS科研費21H00633の分担研究において現在推進中である。

### 4. 研究成果

#### (1) 『満鉄輸送史の研究』の刊行

本書は、満鉄を企業史的観点にとどまらず、輸送を手がかりとした鉄道の機能分析から解明することを目的とした。本書が輸送を切り口としたのは、中国に所蔵される「満鉄档案」とよばれる史料群が原則として非公開のため、それらに依存しない研究の展開には統計書や報告書類の活用が有効と考えたからである。そして本書は、特産物、石炭、旅客を、輸送分析の3視角とし、その各々を満洲事変を境として、1907~31年と32~45年に時期区分して全体を構成した。本書は、全9章から成り、それらを序説となる「序論」、満洲事変以前を主対象とした「第一部」、同以後を主対象とした「第二部」から構成して(図1-1)、

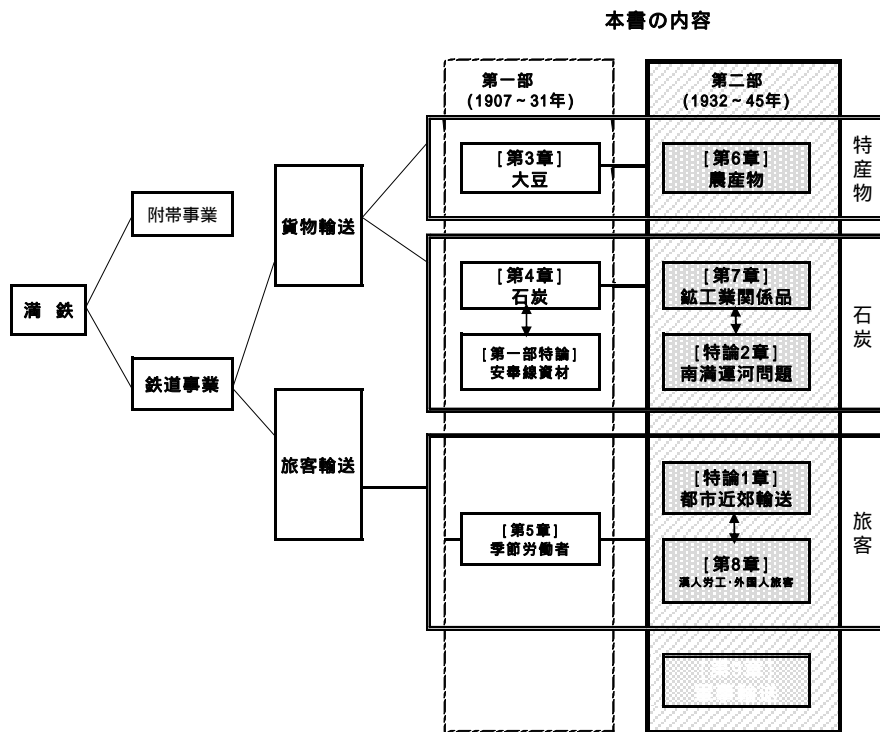


図1-1 満鉄の事業内容と本書各章の関係

そこに終章を加えた。

## (2)戦時期鉄軌道休廃止と資材転用に関する研究

三木理史「第二次世界大戦末期の資材転用と鉄軌道休廃止」(奈良大学紀要 50、2022年)15-32頁、同「第二次世界大戦末期の民鉄休廃止と資材転用」(奈良大地理 28、2022年)73-90頁とした公表した。これらは戦時輸送体制を維持するため内地の閑散線区を選定して資材を調達し、それを占領地や外地はもとより、内地でも特に戦時輸送と密接に関わる路線の強化に転用した過程を追究したものである。それらの事実自体は周知されていても、本格的に追究した成果はほぼ皆無であった。は鉄道博物館所蔵『長崎惣之助文書』(DVD版)を活用することで体系的に分析したものである。計画的に実施した国鉄に対して、辻褄合わせの実施となった民鉄は事実関係の拾遺自体が膨大な紙幅を要したため、「資料」として別に を補論としてまとめた。

## (3)1940年代の満鉄輸送の研究

直接的成果は、三木理史「『満洲国』期の鉱工業と満鉄の貨物輸送」(地方史研究 69-3、2019年)20-46頁、同「『満洲国』期における満鉄旅客輸送」(社会経済史学 85 - 2、2019年)73-96頁、同「『満洲国』期の南満運河計画と鉄道輸送」(交通史研究 96、2020年)52-72頁である。同「南満洲鉄道における鉄道輸送の研究動向」(日本植民地研究 32、2020年)58-65頁、同「南満洲鉄道における小単位旅客輸送 通学と『動車』の運行の関連を中心に」(技術と文明 23 - 1、2020年)1-23頁である。

では 1937~40年度を中心に石炭業と鉄鋼・化学工業の分布に注目し、工業分布を 34年度と 40年度で比較し、また鉱業の中心にあった石炭業の炭鉱分布と消費地の関係

を考察して、連京線の大連 奉天間への輸送集中を明らかにした。では、1930年代後半の旅客輸送を、a. 旅客輸送における漢人利用の実態、b. 日本人利用の増加と満洲国期の旅客輸送の実態、c. 1930年代末からの遊覧客に代わる増加旅客の実態、の3つの論点について検討した。そして、1920年代から継続する漢人出稼者(労工)の長距離大量移動と、それには量的に及ばない日本人旅客が二大柱を構成し、後者は満洲国成立以後の在満日本人人口の増加による短距離移動と、やはり増加傾向にある日本人旅行者の比較的長距離の移動に大きく二分されてきていたことが明らかになった。では、満洲国期における南満運河計画と、で明らかになった連京線の輸送輻輳を関係づけるために、a. 南満において運河が注目を得た1930年代後半時点での遼河水系の水運利用の解明、b. 連京線の輸送輻輳を緩和する南満運河計画の相互補完の契機を実証することを論点に検討した。運河開削計画は輸送逼迫の著しい鉄道輸送の補完はもとより、将来的には北満との連絡運河を開削して農産物輸送への活用を企図したもので、満洲国成立による新たな産業化が水陸間の競合関係を補完構想へと転換させたことが明らかとなった。

は本稿では、満鉄を企業史的観点にとどまらず、その輸送に力点を置く鉄道史研究の対象とした研究の動向を整理し、今後の課題を展望した。特に浩瀚な岡部牧夫の研究史整理を発端として、特産物、石炭、漢人出稼者を、その三本柱として整理した。は満鉄における都市近郊輸送と動車との関係に関する議論を通じて、同鉄道線における小単位旅客輸送の特徴の解明を課題とし、その内容を以下の4点に要約した。1. 満鉄の都市近郊輸送は、創業当初附属地の小学校通学生向けに萌芽した。それに向けた乗車制度を整えたが、細長く広がる附属地の学校の開設密度は低く、一方で寄宿舎などの整備によっても遠距離通学の解消に努める必要があった。2. 満洲国成立後、南満では教育機関の密度を高めて列車通学の割合は減少した一方で、日本権益の拡大した北満地域は補助的小学校相当施設設置で対応し、直接鉄道通学者の増加につながらなかった。3. 満鉄の動車輸送は1930年からほぼ100km前後を上限に主に社線区間で進んだ。まず短距離の支線で効果を発揮し、ボギー車の開発を待ち比較的長距離の連京線区間列車にも動車が普及した。特に1920年代まで混合貨物列車が担う通学輸送を、動車に転換して客貨分離を推進した。4. 満洲では、動車の導入によって車両の運用効率向上の期待出来る区間は少なく、燃料を含めた消耗品価格の低減効果が大きかった。しかし動車用消耗品価格が高騰した最末期にまで揮発油動車の増備継続は小単位輸送への経済性の反映と考えられる。

なお、～の各研究は、その後改稿のうえで(1)の『満鉄輸送史の研究』に収録している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 三木理史	4. 巻 39
2. 論文標題 大手民鉄閑散線区の廃止と沿線地域 名古屋鉄道の岐阜県閑散 4 線区廃止を事例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鉄道史学	6. 最初と最後の頁 3-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 27
2. 論文標題 1950年代の地方鉄道休廃止とその要因 高度経済成長期前の仙台鉄道休廃止を事例に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良大学大学院研究年報	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 50
2. 論文標題 第二次世界大戦末期の資材転用と鉄軌道休廃止	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 15-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 28
2. 論文標題 第二次世界大戦末期の民鉄休廃止と資材転用	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 奈良大地理	6. 最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 32
2. 論文標題 南満洲鉄道における鉄道輸送の研究動向	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本植民地研究	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 23
2. 論文標題 南満洲鉄道における小単位旅客輸送 通学と「動車」の運行の関連を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 技術と文明	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 49
2. 論文標題 筑後平野の軌道網における技術変革と休廃止 - 昭和初期の筑後軌道廃止を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 奈良大学紀要	6. 最初と最後の頁 11-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 69 - 3
2. 論文標題 「満洲国」期の鉱工業と満鉄の貨物輸送	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地方史研究	6. 最初と最後の頁 20 - 46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 85 - 2
2. 論文標題 「満洲国」期における満鉄旅客輸送	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会経済史学	6. 最初と最後の頁 73 - 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20624/sehs.85.2_183	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 26
2. 論文標題 日本における鉄軌道休廃止の長期的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良大地理	6. 最初と最後の頁 14 - 32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 61 - 1
2. 論文標題 書評：林采成『鉄道員と身体 帝国の労働衛生』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア経済	6. 最初と最後の頁 68 - 71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24765/ajiakeizai.61.1_68	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 三木理史	4. 巻 96
2. 論文標題 「満洲国」期の南満運河計画と鉄道輸送	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 交通史研究	6. 最初と最後の頁 52-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20712/kotsushi.96.0_52	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -



〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三木理史
2. 発表標題 「日ソ戦争」期における中国東北の鉄道輸送
3. 学会等名 科研「日ソ戦争および戦後の引揚・抑留に関する総合的研究」研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三木理史
2. 発表標題 1940年代の満鉄輸送と軍事 関特演時の輸送を中心に
3. 学会等名 「日ソ戦争および戦後の引揚・抑留に関する総合的研究」研究集会(基盤研究A / 代表者：北海道大学大学院文学研究科教授白木沢旭児) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 三木理史
2. 発表標題 高度経済成長期における国鉄幸袋線廃止
3. 学会等名 第48回交通史学会大会(シンポジウム報告 於・近畿大学) (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三木理史
2. 発表標題 対樺太輸送経路の形成と稚内の港湾都市誌 宗谷(本)線と鉄道省稚泊航路の形成をめぐって
3. 学会等名 第64回サハリン樺太史研究会例会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 三木理史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 419
3. 書名 満鉄輸送史の研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------